

女の文体の移り変り*

—過去 40 年間の新聞投書をめぐって—

熊谷 滋子

はじめに

1995年10月15日付け『朝日新聞』の「声」の欄に、「女性の言葉で優しい記事を」という見出しの投書が載っていた。男性は忙しくても新聞を読むが、女性にはあまり読まないように見えるので、この原因を社内の女性社員に聞いてみたら、「新聞は男社会の話題が、男性向けに“男語”で書かれているから」読まないと言っていたので、女性には「優しい」語りかけるような記事づくりが求められていると、男性投稿者は結んでいた。この投書によって、もやもやしていたものが、私の心の中に沸き上がってきた。はたして、「女性の言葉」なるものがあるのか、またあるとするなら、どのようなものかということである。

Robin Lakoff (1975) は、英語において、女性特有の語彙や言い回しが存在していると指摘し、その後のジェンダーと言語の研究に一石を投じた。例えば、色彩関係の語彙は、女性の方がよく知っていて、mauve(青みがかった薄紫色)という単語は、女性が使う限りは普通だが、男性が使うとなると、その人は、皮肉まじりに女を装っているか、ホモセクシュアルか、あるいは、インテリア関係の仕事をしている人という含みが出てくる。さらには、lovely 等のある種の形容詞は、女性のみが使用するものであり、付加疑問文は、自信のなさを示す女性がよく使用する構文であると指摘している。Lakoff の意見は、その後、反論が出されるなど、今でも、様々な議論のきっかけとして、紹介される程、影響力をもったものである。彼女の結論は、女性は女らしく話すと、対等の人間としては見てもらえず、自己主張もできず、一方、女らしく話さないと、女性としては見てもらえず、ばかにされてしまう、というジレンマに陥らざるをえない状況があり、言語との関係でも、女性は不利な立場に立たされているとしている。

先にあげた投書と Lakoff の指摘をきっかけに、日本語における文体とジェンダーの関係を捉える研究の一つの方向性を探ってみたいというのが、本稿の目的である。文体に女らしさが存在するのか、それらがどう具現されてきたのかを、歴史的視点を取り入れて検討していきたい。資料としては、『朝日新聞』の投書欄である「声」と「ひととき」をとりあげ、過去 40 年間について、女の文体がどう変化してきたのか、あるいは、変化していないのかを、みてみたい。

一、投書をめぐる研究

実際に資料の分析に入る前に、これまでの投書についての研究を概観したい。投書の研究では、国緒英子 (1987)、中西清美 (1992)、佐竹久仁子 (1995)、寿岳章子 (1966) らがいる。

国緒、中西、佐竹らは、投書の文体に性差は存在しているということで、一致している。これらの指摘をまとめると、男性は、意見主張タイプで、型にはまった紋切り型(国緒)、だ体、である体で、世相を憂い、強い調子で政府を非難している(中西)。一方、女性はです・ます体で、自分にひきつけた内容であり、具体的で、手紙調で柔らかく、主張は弱い(国緒、中西)。佐竹は、さらに、女性がより多く使用する表現をあげて、詳しい分析を試みており、「傾向的な性差がみられる」(佐竹 1995: 67) と結論付けている。

一方、寿岳 (1966: 122~140) は、「新聞に投書するような人たちの文章、あるいは女流小説家あたりでは全く女の文の長さは、男のそれと変わらない。」とし、「今までたとえば、新聞の投書族の作文もそんなに男性といろいろな統計上の性格がちがうわけではない」と指摘し、投書でのジェンダーによる違いは、あまりないとしている。この点において、先にあげた分析とは、意見を異にしているが、「女性特有の項目」として、「夫」「主人」ということばが多く使われているという点では、何らかの性差があることは認めている。

これらの先行研究を念頭に入れながら、本稿では、『朝日新聞』の投書欄である「声」と、女性のみが投書できる「ひととき」を分析対象にし、それらの中に、「女らしい文体」がどのように具現され、時代の流れによって、どう変化してきたのか、ということに注目して、考察していきたい。これらの作業を通して、言語とジェンダーの関わり、ひいては、社会関係の反映としての言語についての示唆を探したい。

二、「声」の欄における移り変わり

1. 調査の方法

今回は、『朝日新聞』を取り上げ⁽¹⁾ 1955年から10年ごとに1995年までの10月一ヵ月分を調べ、調査項目としては、佐竹(1995)を参考にしつつ、さらに絞りこみ、寿岳(1966)で指摘された、女性特有の項目も入れて行なった。

調査項目は、「私」、「思う」⁽²⁾丁寧体(です・ます体)、身内への言及(親戚等も含む)の4つである。最初の2つは、これらの表現によって、文の主張が弱くなり、断定を避けた表現となり、女性が多く使用するとされているものである。丁寧体は、これまでの研究をはじめ、世間一般の意識として、女らしさを象徴するものとして認識されていることによる⁽³⁾また、身内への言及は、世間でも言うように、女が特に身の回りのあれこれ、家族のことを書くことが多いとされ、寿岳でも指摘されているので、入れてみた。さらに、以上の4項目全てを満たすもの(①)と、全く満たさないもの(②)をみてみた。今回の調査では、さらに、特に女性の投書の「職業」(ないしは、立場)の申告として、「主婦」としたものに注目し、女性のおかれた社会的立場との関わりを投書欄を通して、どのように変化してきたのか、についても考えてみたい。

2. 調査結果

調査した結果は、以下の通りになった。

表1 「声」の欄の移り変わり(それぞれ10月の1ヵ月のみ)

()は%

年度	1995		1965		1975		1985		1995	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
「私」	34(57,6)	11(64,7)	61(45,5)	22(44,9)	77(48,4)	32(66,2)	61(38,6)	52(53,1)	65(47,4)	49(69)
「思う」	29(49,2)	9(52,9)	52(38,8)	28(57,1)	63(39,6)	30(62,5)	70(44,3)	55(56,1)	49(35,4)	30(42,3)
丁寧体	15(25,4)	6(35,3)	34(25,4)	35(71,4)	13(8,1)	17(35,4)	20(12,7)	41(41,8)	22(16,1)	29(40,8)
身内*	0	5(29,4)	8(5,9)	13(26,5)	2(1,3)	17(35,4)	5(3,2)	32(32,7)	6(4,4)	27(38)
①	0	0	1(0,7)	2(4,1)	0	2(4,2)	0	9(9,2)	0	6(8,5)
②	11(18,6)	3(17,6)	39(29,1)	4(8,2)	46(28,9)	8(16,7)	45(28,4)	12(12,2)	43(31,4)	8(11,3)
投書合計 (主婦の割合)	59	17(主6 (35,3))	134	49(主31 (63,3))	159	48(主31 (64,6))	158	98(主58 (59,2))	137	71(主35 (49,3))

*身内への言及のあるもの

①：全ての項目を満たしたもの ②：どの項目も満たさないもの

「主婦」とは、あくまでも投書での自己申告による

A) 丁寧体の男女差について (女の割合-男の割合) (%)

1975年	27.3
1985年	29.1
1995年	24.7

B) 丁寧体使用における女性の中での「主婦」の占める割合 (%)

1975年	59
1985年	78
1995年	59

3. 考 察

2の調査結果より、これら4つの項目に関して、女性の方が、より多く使う傾向にあるということが、分かる。つまり、性差が存在するということである。しかし、今回の調査において、過去40年間について調べた結果、その「性差の傾向」の方向にも変化がみられることがわかる。ただ、ここで、おさえておかなければならないことは、1965年以前と1975年以降の間には、大きな溝が存在していることである。性差の傾向が、1975年から1995年にかけては、ある方向性が見えてくるが、それ以前とは異なっているということである。例えば、丁寧体を取り上げてみると、1975年から1995年までは、女性の使用する割合は高いが、男性も使用するようになってきていることが示されている。しかし、1965年以前は、男性の丁寧体の使用がぐんと高い。

これは、どういう要因によって、このようになったのか、今後の検討課題としていかなければならないが、今の段階で言えることは、1970年代は、高度経済成長を遂げつつあり、男女の社会的関係も、安定し、固定化し、「男は仕事、女は家庭」という、男女それぞれの意識上のステレオタイプが安定期を迎えた時代ではないかということである。それが、文体上にも影響を与え、ある一定の方向性を示すようになったのではないかと思われる。

今回は、そのようなわけで、1970年代からの傾向の方向性について、指摘したい。②を除いた全ての項目で、女性の割合が男性のそれよりも高いということを確認した上で、傾向の移り変りをみていこう。「私」については、男女とも変化していない。一方、「思う」については、女性の方が、使用する割合が減ってきている。丁寧体については、女性も依然として使用するが、男性の方も使用するようになってきており、丁寧体=女性という図式が、くずれつつあるこ

とを示唆している。

さらに、丁寧体の男女差をみている(A)と、1975年以降の割合が、縮まってきたことが分かる。投稿者の内訳をみている(B)と、女性では、「主婦」とした人が、女性全体での丁寧体使用の60～80%を占めている。このことは、一方において、男性の丁寧体使用が増えてきたことと、60代以降の「無職」とした人の投稿者の増加(後述する)と関連があるのではないだろうか。つまり、丁寧体は、女らしさというよりも、経済的に弱い立場にある者が、自己主張する際に使用する文体の一つではないかということである。この点については、「ひととき」の分析結果との関連でも、さらに述べるつもりである。

身内への言及については、女性が圧倒的に多いが、男性も言及するようになってきている。しかし、依然として、女性は、家庭内の身近な関係に、良くも悪くも、縛られているのかもしれない。

4つの項目全てを満たしているのは(①)、女性に見られ、男性は、なんと1965年10月の一人だけである。この点から、全てを満たす投書が、いわゆる「女らしい」文体という可能性が感じられる。1975年以降に関して、17名中11名が「主婦」による投書であることも興味深い。ちなみに、先にあげた、全てを満たした男性は、「年金の受け取りと老母の死」という見出しで投書した、50才の「無職」の歩行不能の男性である⁽⁴⁾これは何を意味するのだろうか。全ての項目を満たす文体は、女らしいのか、それとも、社会的立場の上で弱い者が、意見を述べる際に、こういう文体を使わざるをえないのか、さらに、今後、検討したい課題である。

最後に、「主婦」についてふれておきたい。先にも述べたが、丁寧体使用が多く、全ての項目を満たしている割合(①)も高く、いわゆる、「女らしい文体」を実践しているのは、「主婦」であることがわかる。「主婦」は、家事・育児に専念し、家庭内のあれこれを話題にして投書する傾向にある。これは、女らしいとされる生き方、あるいは、つくられた女らしさを実践していく立場が、「主婦」に象徴されているのかもしれない。ちなみに、「主婦」と申告した投書は、1975年をピークに、減少傾向にあり、あとでもふれるが、「主婦」が肯定的イメージを持ち、アイデンティティーとして安心して受け入れられたものとなっていたのは、1970年代までであり、それ以降は、兼業主婦が増えてきたためか、あまり、肯定的なものではなくなってきているのではないかと思わせるような傾向、つまり、「パート」「講師」等、「主婦」以外のものを申告している人が増えてきたということから言えるのではないだろうか。

三、「ひととき」欄の移り変わりと「声」欄の比較

1. 調査方法

前章では、「声」の欄について調査したが、さらに、文体とジェンダーの関係をみるために、女性だけが投書できる「ひととき」の欄についても分析し、男女共に投書できる「声」の欄との比較をすることによって、「女らしい文体」の実態を明らかにしたい。

「ひととき」の欄は、1952年1月より設けられ、最初の頃は、有名人が写真入りで投稿していたが、同年5月頃より、完全に一般の投書でうめられるようになった。また、最初は、夕刊の最後のページに掲載されていたが、1963年1月より、朝刊に移り、女性だけの欄も、少しずつ、その地位を高めてきて、現在に至っていることが分かる。

2. 調査結果

「ひととき」の欄の調査の結果は、以下の通りである。

表2 「ひととき」の欄の移り変わり（それぞれ10月の1ヵ月のみ）（ ）は%

	1955	1965	1975	1985	1995
「私」	21(91,3)	24(92,3)	29(93,5)	25(80,6)	28(93,3)
「思う」	17(73,9)	19(73,1)	22(70,9)	19(61,3)	15(50)
丁寧	11(47,8)	10(38,5)	12(38,7)	10(32,3)	9(30)
身内	15(65,2)	16(61,5)	28(90,3)	24(77,4)	26(86,7)
①	6(26,1)	4(15,4)主2	6(19,4)主4	5(16,1)主3	4(13,3)主2
②	0	0	0	0	0
主婦の割合	0(申告なし)	12(46,2)	25(80,6)	18(58,1)	21(70)
投書合計	23	26	31	31	30

3. 考察

「声」では、1975年以降の傾向の変化がある一定の方向性をもったものとして捉えられたが、「ひととき」では、1955年頃からすでに、その傾向が一貫しているということが興味深い。これは、何故だろうか。

この相違点を考える前に、「ひととき」の傾向の変化と「声」のそれを個々に
おさえていきたい。まず、「私」については、1955年からこれまで、あまり、大
きな変化はみられないが、「声」よりも、割合は高い。「思う」については、「声」
より高いが、変化の傾向は共通していて、減っている。

丁寧体については、前章でふれたが、いわゆる「女らしい文体」の象徴とし
て意識されきたものであり、予想としては、断然、その使用は高いのではない
かと思われたが、結果としては、その反対で、「声」よりも、低くなっている。
傾向は、使用する割合が減ってきており、丁寧体＝女性という図式がこの欄に
あっても、崩れてきたことを示している。それでは、何故、「女らしい文体」と
される丁寧体は、この欄では、「声」より使用されないのだろうか。

「ひととき」の書き手は、読み手を同じような立場の女性、つまり同性、を
想定していると思われるので、わざわざ、同性に向けて、女らしさを強調する
必要はないと考えているのではないかと考えられる。これは、言葉を換えて
言うなら、女子トイレに入る際に、わざわざ化粧する人がいない（一人もいな
いということではないが）ことと同じなのではないだろうか。むしろ、女子ト
イレで化粧直しをして、出てくるのである。「ひととき」を女子トイレと結びつ
けたのは、言い過ぎかもしれないが、女性だけが集まる所という意味で関連性
がなくもない。この点で、男女の読み手を想定する「声」とは、大きく異なる
のではないだろうか。

身内への言及については、圧倒的に「ひととき」で高くなっており、その割
合たるや、「声」の2倍にもなっている。これは、身内のことを言及しなくては、
自分のことが語れない、いわゆる「主婦」の立場と関心がそうさせるのであろ
う。読み手として、同じ「主婦」を想定して、家庭内のあれこれを、井戸端会
議風に話している風景が浮かんでくるのは、私だけではないだろう。

①の、全ての項目を満たしている人は、減りつつあるが、「声」よりも高く、
女らしさ、あるいは、「女」の立場をよりよく示しているのではないだろうか。
そして、「主婦」の割合も半数以上である。一方、②の項目では、「声」へ投書
する女性とは違って、全く存在しない。つまり、調査項目のいずれかを使用し
て、投書しているのが、「ひととき」の女性なのである。②の項目を、さしあたっ
て、「男らしい文体」とすると、そういう文体で表現する女性は、「ひととき」
では、一人もいないということになる。

以上、「ひととき」と「声」をまとめると、1955年から、傾向として、「ひと
とき」の書き手は、女性で、しかも「主婦」が多く、読み手も女性で、主に「主

婦」を想定していることがうかがえる。したがって、自己表現においては、女らしさをことさら出す必要がなく、飾らずに、本音を言うという点で、一貫した変化の傾向があることが納得できる。つまり、主に想定される「主婦」の社会的立場が一貫しているので、興味、関心も一貫しており、さらには、1975年以降の「声」にみられる女性全体の傾向にそう形で、文体へと影響を与えていることが分かる。ただし、内容については、1950年代、1960年代は、社会的問題についてのもものが少なくない。これは、当時、新聞全体において、あるいは投書欄においても、発言できるのは、主に男性であったということから、女性が発言できるのは、「ひととき」の欄を通してのみなされているということから想像できる。1970年代以降は、「声」の欄も充実し、女性の投稿者も増加し、社会的問題は、そちらの方で訴え、「ひととき」の欄ではもっぱら、家庭内のあれこれ、自画自賛、もしくは、家族礼賛型の内容に、新聞紙面における分業が進んできたものと思われる。したがって、1950年代の「ひととき」を読んで、女性の生き方や社会的弱者の問題等、内容が充実しており、私自身、今でも励まされたり、考えさせられたりするものが多いが、一方、紙上分業が確立してきた、現在の「ひととき」では、家庭のあれこれを事細かに述べたてているにとどまり、時に辟易することも多々あることは否定できない。

「声」の欄では、読み手は、男性も女性も想定し、また、様々な職業、立場、年齢の人々を考慮して書く必要があるので、単に暗黙の了解としての「主婦」ではいられない。自分の立場を改めて、位置付けし、意味付けしていかなければ、自分の意見や主張を読み手に、容易には受け入れてもらえないのではないだろうか。ここで、最初にあげた、Lakoffのいうジレンマ、がこの欄でみえかくれする。つまり、女らしく書くことと、女らしさを越えて、人間として書くということのジレンマである。「声」の欄では、女らしく書くという規制（時に自己規制であるが）が、「ひととき」の欄よりも、丁寧体を使用されるという点で確認され、一方において、単なる井戸端会議としてではない、人間として意見を言いたいという思いが、丁寧体を除く全ての項目で、「ひととき」よりも低く抑えられていることでわかる。これは、ジレンマとまでは呼べるものではないかもしれないが、ここで、指摘しておきたい。「ひととき」では、女らしく書かなくても、女であることが前提となっているし、読み手も同性であると予想できるので、女らしさにこだわらなくてもすむので、丁寧体をそれ程使用しなくてもよいのである。一方、「主婦」の最大の関心事(?)である家族や身内のあれこれについては、本音を語るごとくに、書きつらねることができるという

意識が働くのではないか。

つまり、これまで述べてきた「女らしい文体」を、よりはっきり定義し直せば、形式の上での女らしさと、内容の上での女の、特に「主婦」の、立場に制約をうける関心、興味からの女らしさとを区別した方がいいのではないだろうか。つまり、外向けの装いとしての「女らしさ」と、中身の上でのその立場であるがゆえに、良くも悪くも制約を受けた「女らしさ」である。前者が、丁寧体であらわされ、後者が身内への言及などによってあらわされるということである。「声」の欄では、形式の上での女らしさを保ちながら、内容の上では、あくまでも、性を越えた人間としての意見を述べたいということで、身内への言及がそれほどもなく、一方、「ひととき」の欄では、形式の上での女らしさは、さほど気にせず、内容の上での女らしさは前面に出していくという構図である。

四、投稿者の社会的立場—「主婦」をめぐる

これまで、文体とジェンダーの関わりを中心に論じてきたが、さらには、言語と社会の関係をみていくために、投稿者の自己申告した社会的立場、特に「主婦」についてふれておきたい。投書欄には、住所、氏名、年令、職業を書くことがきまりとなっている。これまで、いわゆる「主婦」という語彙の持つ意味や含みについて、様々な分野で議論されてきている。「学生」と同様に、職業というより、社会的立場とでもいうものだろうが、「主婦」に対する意識が、微妙に変化してきているのではないかということ、投書から指摘したい。

投書欄の職業を含め、自分の立場の申告は自由であり、「主婦」としようが、「無職」としようが構わないが、かといって、自分のアイデンティティーであるので、あまり単純ではないらしい。

「主婦」と申告した投稿者の割合⁶⁾は、1975年をピークに、下がってきている。ピーク時で、「声」では、64.6%、「ひととき」では、80.6%が、女性の中で「主婦」の占める割合である。つまり、1970年代では、「主婦」というのは肯定的なアイデンティティーであったと思われるので、そのような申告で十分、満足できたのであろう。1965年の「ひととき」で、「主婦専業もまた楽し」という投書⁶⁾があり、いわゆる専業主婦に対するあこがれやそれによる自己肯定のきざしがみえる。一方、1984年には、竹中恵美子(1995:112)が指摘するような、パートを含む「働く主婦の時代」がやってきて、専業主婦の割合を越えた時期であり、専業主婦というアイデンティティーに、こだわりを持つようになって

てきたのではないかと思われる投書が、1985年10月に2人ある。それは、「専業主婦」と申告してきたものである。一人は、28才で、主婦の労働を国勢調査では「仕事」とみなしてくれないことへの怒り⁽⁷⁾もう一人は、51才で、「賃金を得る職業婦人のみが、一人前の人間なのか」という、キャリアウーマンの気負いに対する反発を⁽⁸⁾それぞれ書いている。この2人は、単なる「主婦」では十分ではなく、「専業」とすることで、「主婦」としてのレッテルをさらに補強していこうとする姿勢、意気込みがみえる。逆からみれば、それだけ、「主婦」の立場、それに対する意識が、不確定になってきているということがうかがえる。あるいは、1984年10月の「ひととき」では「有職主婦」と申告した54才の女性が、「働いたことのない主婦は理解出来ないかもしれないが」という含みの投書⁽⁹⁾をしている。つまり、ここでも、単なる「主婦」では、満足できない、なんらかの冠を必要としているのが分かる。

1970年代と違って、1980年代には、「主婦」という社会的立場に、それほど、肯定的なものが感じられず、「専業主婦」や「有職主婦」、さらには「パート事務」等と申告することで、自分の立場を保障していこうとする傾向がみえてくる。さらに、1995年の「ひととき」では、やはり、国勢調査への怒りを書いた、「在宅介護も労働では」と題する投書⁽¹⁰⁾があり、自らの立場を「介護人」としている。

「主婦」と申告した人の社会的立場をめぐる、いろいろと議論があるが、シングルの方は、自らを「主婦」とは名のらないだろうから、結婚している女性を「主婦」とすることは、多くの人の認識であろう。辞書の定義では、「家族が気持ちよく元気に、仕事（勉強）が出来るように生活環境を整え、食事などの世話を中心になってする婦人。〔主として、妻にこの役が求められる〕」（新明解国語辞典、三省堂、1994年）というように、結婚して、妻の立場にある人が「主婦」であることを示している。

このような意識の中でも、自らを「無職」とする人もいる。以下に示したい。

無職と申告した人の数

	1955	1965	1975	1985	1995
ひととき	0	1	0	2	0
声 女	5	1	3	5	4
男	3	2	14	31	34

女性では、「ひととき」では、身障者、一人暮らし、夫を亡くした人等が、「声」では、特に60代以上の方が、それぞれ「無職」としている。しかし、申告した数は、横ばいで、特に「ひととき」では、「主婦」として投書する人がほとんどである。つまり、女性で「無職」とする人は、むしろ、それを通じて、自らの立場を主張しているのかもしれない。

男性では、1975年以降は、60代以上の投稿者が増加したことが、「無職」とする人の増加になっている。「年金生活者」や「元〇〇」と申告する人もいる⁽¹¹⁾一方で、「無職」と申告する意識、姿勢はどんなものだろうか。投書の内容を見れば、依然として、社会、政治批判をしているものが多い。

男女を通じて、「無職」ということの持つ社会的意味を、さらに深く、言語的側面からも解明してみる価値があるのではないだろうか。今後の課題としたい。

おわりに

本稿では、言語とジェンダーの関わりをさぐる手始めとして、この40年間の新聞投書をめぐって、「女の文体」がどのように変化してきたのかを調べてみた。これまでの研究の成果を生かしつつ、「性差の傾向」がどのような方向性をもっているのかということ、ある程度みることができたのではないかと思う。あるいは、むしろ、私たちの意識とそれが文体にどう表現されているのかという観点から、今後の検討したい課題を見つけだしたというのが、本稿の成果である。

注：

*今回の投書の分析において、佐竹久仁子氏には、投書に関するこれまでの研究成果や、その後のデータの統計処理に関する示唆も含めて、有益なコメントをいただいた。ここに感謝したい。

1. 今回は、『朝日新聞』の東京版についてのみ分析した。今回、一紙に絞って調査したのは、複数の新聞を比較するには、あまりにも様々な要因(例えば、編集上の方針)がからんでいる可能性がぬぐえきれないため、まず、さしあたって、一つに絞って、やってみることにしたい。今後は、今回のことを土台にできれば、ぜひ他の新聞にも対象を広げて試みてみたい。
2. 「思われる」という表現ははずしたい。同じ「思う」ではあるが、前者に

- は、まだ、客観性をもった意味合いが感じられるからである。
3. 大学生に、投書者の性別判断をした結果(ここでは、詳しく立ち入らない)と、武田春子(1990)のまとめから、丁寧体を使うのは女性の文体であるとすることが、支持される。
 4. 1965年10月27日付けの「声」の欄である。
 5. 「ひととき」では、編集上の方針かもしれないが、1953年1月から1959年3月までは、「主婦」という記載はなく(住所、氏名のみ)、職業のある人のみが、住所、氏名、職業(例えば、教師)が記載されていた。1959年4月より、「主婦」という記載が増えてきた。
 6. 1965年10月20日付けの「ひととき」の欄である。
 7. 1985年10月5日付けの「ひととき」の欄である。
 8. 1985年10月24日付けの「ひととき」の欄である。
 9. 1984年10月19日付けの「ひととき」の欄である。
 10. 1995年10月17日付けの「ひととき」の欄である。
 11. 「年金生活者」と申告したのは、1995年10月18日付けの「声」の欄である。また、「元〇〇」での、職業名は、「公務員」「教員」「議員」等があった。どのようなものを申告するのか、傾向がありそうである。

参考文献：

- Coates, Jennifer and Deborah Cameron (1988) *Women in Their Speech Communities*. Longman.
- 寿岳章子(1966)『レトリック—日本人の表現—』共文社。
- 寿岳章子(1967)『日本語と女』岩波新書。
- 国緒英子(1987)「投書のパタンと表現」『言語生活』10月号、筑摩書房、40-46。
- Lakoff, Robin (1975) *Language and Woman's Place*. Harper Torch Books.
- かつえ・秋葉・れいのるず訳(1993)『言語と性 英語における女性の地位』有信堂。
- Lakoff, Robin (1990) *Talking Power*. Basic Books.
- McConnell-Ginet, Sally Borker and Nelly Furman eds.(1980) *Women and Language in Literature and Society*. Praeger. 別府恵子訳(1989)『文学と社会における女性と言語』弓書房。
- Mills, Sara (1995) *Feminist Stylistics*. Routledge.

- 中村桃子 (1995) 『ことばとフェミニズム』 勁草書房。
- 中西清美 (1992) 「日本語と性差」『女性学年報』 10月号、日本女性学研究会 91-103。
- O'Barr, William M. and Bowman K. Atkins (1980) "Women's Language or Powerless Language?" *Women and Language in Literature and Society*. Praeger.
- れいのるず・秋葉かつえ編 (1993) 『おんなと日本語』 有信堂。
- 佐竹久仁子 (1995) 「女の文体・男の文体」『ことば』 16号、現代日本語研究会。 52-68。
- 竹中恵美子 (1995) 『女性論のフロンティア—平等から衡平へ』 有斐閣。
- 武田春子 (1990) 「言語性差のステレオタイプ」『女性学年報』 日本女性学研究会。 28-39。
- Throne, Barrie and Cheris Kramarae and Nancy Henley eds. (1983) *Language, Gender and Society*. Newbury House.